

要旨

本研究は、「バルバリア海賊」の終焉過程の分析を通して、19 世紀初頭に生じた国際秩序の構造変動について考察するものである。

19 世紀初頭、ヨーロッパではナポレオン戦争が終結し、諸列強の協調体制に基づくウィーン体制が成立する。それは、競争的な力の均衡に基づく 18 世紀までの国際秩序から政治的な協調に基づく国際秩序への転換であった。ヘドリー・ブルの用語で言えば、国際社会が形成されたのである。それでは、ヨーロッパにおける国際社会の形成は、その外部に位置する非ヨーロッパにどのような影響を与えたのであろうか。エドワード・キーンは国際社会の内部における作用を「寛容」原理、外部に対する作用を「文明化」原理と呼んでいる。本研究では 19 世紀初頭のヨーロッパ＝北アフリカ関係史を通してこの二つの作用の相互関係について検討する。

具体的な研究題材は、オスマン帝国アルジェ領、チュニス領、トリポリ領による私掠行為、いわゆる「バルバリア海賊」に関する外交史である。特に、「バルバリア海賊」が終焉した 19 世紀初頭に焦点を当てる。「バルバリア海賊」は、15～16 世紀にかけて北アフリカに勢力を広げるスペインとの戦いの中で生みだされる。バルバロッサ兄弟などの活躍はよく知られている。ただし 17 世紀以降になると、北アフリカ諸領はフランス、イギリス、オランダとそれぞれ条約を締結し、和平関係を構築する。18 世紀には、諸領への貢納を条件に他のヨーロッパ中小国ともそれぞれ条約を結び、「バルバリア海賊」の活動は徐々に沈静化する。18 世紀の西地中海における国際秩序は、ヨーロッパとイスラームという国際秩序原理の多元性、ヨーロッパ諸国と北アフリカ諸領間の外交関係の個別性、また、交渉における相互性という三つの特徴を指摘できる。

こうした 18 世紀までの国際秩序をいち早く拒絶したのは、1776 年に建国した新興国のアメリカ合衆国であった。アメリカは北アフリカ諸領への貢納の支払いを拒否し、トリポ

リ領、アルジェ領と相次いで衝突する。19世紀初頭になると、アメリカは地中海に大艦隊を派遣し、自らの力で貢納の慣習を放棄させ、「バルバリア海賊」問題を解決する。

一方、同時期にはヨーロッパでも「バルバリア海賊」問題への関心が高まりつつあった。ロシアのアレクサンドル1世はイギリスのカーズレー外相に「バルバリア海賊」廃絶のために協議を呼びかける。こうして「バルバリア海賊」問題はロンドンでの国際会議で議題に上り、討議されることとなる。ロンドン会議では諸列強による同盟軍構想が草案としてまとめられる。草案は列強首脳によるエクス・ラ・シャペル会議に送られて議論されたが、各国の意見はまとまらなかった。ただし、「バルバリア海賊」の廃絶を諸領に迫る通告行動について合意に至り、その役割をイギリスとフランスが担うこととなった。「バルバリア海賊」問題は、もはやヨーロッパ各国が個別に対処する外交問題ではなく、列強が共同して対処する国際問題へと転換した。それは、ヨーロッパと非ヨーロッパを二分する国際政治の始まりであり、同時にヨーロッパの決定が非ヨーロッパを拘束するヨーロッパ中心の国際政治の始まりでもあった。

ヨーロッパが「バルバリア海賊」廃絶の根拠としたのは、人道的観点と商業活動・公海航行の自由であった。エクス・ラ・シャペル会議の決定を伝える英仏艦隊が諸領を訪れ、交渉に当たる。ヨーロッパの要求に対して諸領はヨーロッパとの条約は遵守していること、また自衛のために軍事力は保持することを主張する。ヨーロッパと諸領の主張には、国際関係における正／不正認識にズレが見られる。諸領が従来の慣習や条約に基づいているのに対して、ヨーロッパは人道性や商業活動の自由など近代ヨーロッパで重視された価値観に基づいているのである。つまり、近代ヨーロッパが自らの価値観を普遍的な善と見なす善悪二元論的世界観をとったことで、「バルバリア海賊」の廃絶という国際関係における西洋化が成立したのである。

19世紀の西地中海国際秩序は、近代ヨーロッパの価値観の普遍性、ヨーロッパの一体化という意味での集合性、北アフリカ諸領が国際政治の決定に参加し得ない一方向性という

三つの特徴を挙げることができる。すなわち、ヨーロッパが主体となる普遍的で集合的で一方向的な国際秩序が誕生したのである。また、ウィーン体制というヨーロッパ諸列強の協調体制は、「バルバリア海賊」問題をめぐる諸列強の共同行動に道を開くことになった。国際社会の形成は同時に国際社会の外部との境界線を明白にし、外部に対する差別化を確立したのである。その意味で、国際社会の発展という内部における作用と「文明化」原理としての国際社会の外部に対する作用とは表裏一体の関係なのである。

まとめれば、「バルバリア海賊」の終焉過程からは、19世紀初頭の国際秩序の構造変動を見いだすことができる。それは、多元性から普遍性へ、個別性から集合性へ、相互性から一方向性へという特徴を持つ国際秩序への変化であり、ヨーロッパにおける国際社会の発展と北アフリカに対する国際社会の外部化という二つの作用の同時現出であった。